



復興に向けて
ユニクロができること



自治体機能が失われた中で

三月十一日の大震災発生を受け、ファーストリテイリング（以下FR）CSR部はその翌日から行動を開始した。これまで海外の難民・避難民への支援活動を通じて付き合いのあったNGOなどに声をかけ、衣料支援を念頭におきながら、被災地でのニーズ調査をさっそく始めたのである。一方この時点ですでに、ツイッターやフェイスブックには「ユニクロに支援を期待する」というような書き込みが現われ始めていた。従業員からは直接CSR部宛てにメールが入り、お客様からも「ぜひ衣料支援を検討してほしい」といった声が届き始めていた。CSR部のシェルバ英子さんに、今回の支援活動について話を聞いた。

「非常にありがたいことだと思いました。こういう有事の際に必要とされている企業だということ、自分たちは期待されているのだということが分かって、気持ち引き締まりました。FRグループと、全世界のグループ従業員からの義援金（代表の個人としての寄付十億円を含む）を十四億円、支援物資として衣類七億円相当の寄贈、そして義援金の募金活動のために、全世界のユニクロとグループ各店舗に募金箱を設置し、そのお金は赤十字社などを通じて確実に被災地に届ける——などの方針を、週明けの月曜日決定しました。そこで、七億円規模の衣料支援をどう方法で配布するかが、

BACKSTAGE REPORT

東日本大震災支援の舞台裏 [前編]

ユニクロ社員、被災地で衣料を直接配布する

株式会社ファーストリテイリング CSR部

上岡伸輔 写真家

Kamioka Shinsuke

文、取材・編集部
撮影・上岡伸輔、青木登（ポートレート、会見写真）
photographs by Kamioka Shinsuke, Aoki Noboru



被害の激しかった宮城県女川町

私たちの仕事になりました。

ところが、各県の災害対策本部との連絡がなかなか取れない上に、連絡がついても被災地の行政機関はどこも人命救助や安否確認で手一杯という状態でした。物資支援はどうしても後回しにならざるを得ません。そうした時に福島県二本松にあるJICAの訓練所を倉庫に使えることが分かり、私たちはまずそこにユニクロの物資を集約することにしました。

そして二本松でスタッフが荷を受け入れ、八方に手を尽くしてようやく得た情報をもとに、宮城県内の倉庫に四十七万着分を納品。続いて岩手に五万着分を緊急支援として発送した。しかし、問題は

その先にあった。宮城県内の倉庫にいったん収められたとはいえ、行政はともた衣料配布にまで手が回らない状況だった。「このままではせつなく運んだ衣類がずっと倉庫に眠ったままになるのは目に見えている」。そこで社員ボランティアを募り、自分たちの手で被災地で直接配布する方針に踏み切った。震災から約一週間後のことである。

通称「衣料お届け隊」

「直接配布は、海外での活動でタッグを組んでいたというNGOのJENさんと協力しながらでした。人がよく集ま

る場所——たとえば自衛隊の仮設風呂などの近く——へ出向いて行って、そこに集まってきた人たちに必要な量をお渡しするようにしました。ちょうど青空市みたいな感じで、ユニクロのお買い物袋に入れて配ったこともあって、ちよつとしたお買い物感覚を味わっていただけでした。避難所生活で、配給慣れしている時に、自分で色も選べますし、ユニクロの社員にサイズを尋ねたり、ごく自然に会話も生まれます。JENの方に「これは心のケアにもつながるんですよ」と言われましたが、単に物を配るというだけでなく、精神的な面でのプラス効果もあったようです」

通称「衣料お届け隊」は、三月二十日から毎週末、宮城県石巻市、気仙沼市、岩手県大槌町、陸前高田市などに赴いた。十五人一チームで四班に分かれ、一日で約一万着を配布したという。そして四月



いったん福島県二本松に集約された支援物資は、社員ボランティアの手によって宮城県内の倉庫に運びこまれた



シエルバ英子氏

に入ると、被害のひどかった三陸沿岸にまで足を伸ばすことができるようになった。全商品リサイクル活動で連携していたNPOとのネットワークが、この時も有効だった。

「事前に災害ラジオなどで『きょうは何時から何時の間にユニクロがこの場所にきて、衣類を配ります』と告知されると、一時間ぐらい前から長蛇の列ができて、歓迎されました。三陸沿岸では特に、これまで石巻や一関に店舗があるくらいでしたので、皆さん、『わざわざ来てくれてありがとう』みたいな感じでした。

またブラトップなど、若い人向けだと思っていた商品を、この機会に試してみたらすごく着心地が良かった、と年配の女性から言われたり、作業するのに動きやすいスウェットがものすごく人気を呼んだりしました。当初、私たちは寒さ対策のヒートテックインナーや防寒着を中心にした衣類を想定していましたが、実際に被災地に行くと、靴下とか下着類のニーズが高いことが分かり、すぐに商品構成を変更しました」

現地でのニーズ調査がまず重要という認識は、これまで海外での難民・避難民支援を継続的に積み重ねることで学んできたことだ。海外でのノウハウの蓄積は国内にも活かされたのだろうか。

「そう思います。ニーズは日々変化するもので、配り方についても、ちょっとやり方を間違えたと海外などでは本当に争いの種になってしまっています。幸い、今回は皆さん非常に礼儀正しくて大きな問題は起こりませんでした。ただ、被災の程度には個人差があります。現地に行けばその差異がよく分かります。ですから、家屋全壊の方や、家をすっかり流されてしまった方を優先するなど、私たちも配分方法には配慮したつもりです」

社員からのボランティア希望者はいつになく多かったという。募集に対して定員枠の倍程度の申込みがあり、基本的には全員を受け入れた。活動日は三月二十日から四月二十四日までのうちの十二日間。参加人数は百八十八名。活動エリア、配布枚数は、宮城県(四十七万枚)、福島県(三十万枚)、岩手県(五万枚)、茨城県(三万枚)となっている。

「参加を希望した理由としては、日本人として何か直接の支援をしたいというのが全員に共通していました。そして現地に入ってみてからは、被災者に物資を届けるシステムが欠如しているのを目の当たりにして、『必要としている人に、必要なものが、必要なだけ、最速で確実に届く』支援を目指さなければ、と実感し

た人が多かったようです。ユニクロへの大きな期待を感じると同時に、衣類の果たしている役割というか、『服の力』に改めて気づかされたという声も多くありました」

復興に向けた支援のフェーズに

今回のボランティアには、自ら志願して外部から参加した人間もいた。二〇〇七年からユニクロの海外での支援活動にすべて同行し、その活動の写真を撮り続けてきたカメラマンの上岡伸輔氏である。「震災が起きてから、現地を見ておきたい、写真を撮りたい、という両方の気持ちが募っていたのですが、自分は報道カメラマンでもないで、なかなか踏ん切りがつきませんでした。その時、ユニクロさんの話を聞いて、ボランティアなら自分も少しはお手伝いできるだろうと思って同行させていただきました。

僕が海外の難民キャンプなどでこだわっていたのは、彼らと自分たちはどうしたら通じ合えるのか、自分は写真を通し



上岡伸輔氏

て彼らと何を「共有」できるか、ということでした。最近「災害ユートピア」という言葉をよく耳にしますね。災害時に人は助け合ったり、無償の行為をすすんで行うという……。阪神・淡路大震災の時も、被災者と救援者の間に、相互扶助的な共同体が自然発生的に生まれたといえます。そういう共同体感情が、今回もあるのではないかな、という興味もありました。

ただ、海外と違って同じ日本人同士ですから、逆に気を遣ってしまふ部分もありました。海外の難民キャンプと同じようには服を配れないし、僕も被災者にカメラをうまく向けられない。何か難しい。実際、写真を撮っていて、どこかのボランティアの人に罵声を浴びせられました。「バカが写真撮ってる」みたいな感じで。被災者の気持ちも考えないからなん奴だ、と思われたようです。いまでもどう反応すべきだったかと思返すのですが、つくづくカメラマンとして覚悟や信念がないと撮れないことを思い知らされました。

そんな中でユニクロの社員はよくやっていると思いました。一人ひとりの動きが非常にすばやい。店長経験のある人などは、衣類を配る時も「こう並んで」とか、オペレーションがともかく早い。時間をかけないで最速で行動するのが身につけていると感じました。フットワークが軽く、身体を動かすことが苦にならない人たちです」

ユニクロの今後の支援活動だが、追加の支援物資の寄贈がすでに始まっている。六月十一日から宮城、福島、岩手の各被災地に、これからの季節に必要な夏物商品のドライポロシャツやショーツ、トランクス、ソックスなどの下着類、ユニクロの商品約二十二万着、約二億四千万円相当が寄贈される。また社員が現地に入って、これらの衣類を直接配布する活動もこれまで通りである。

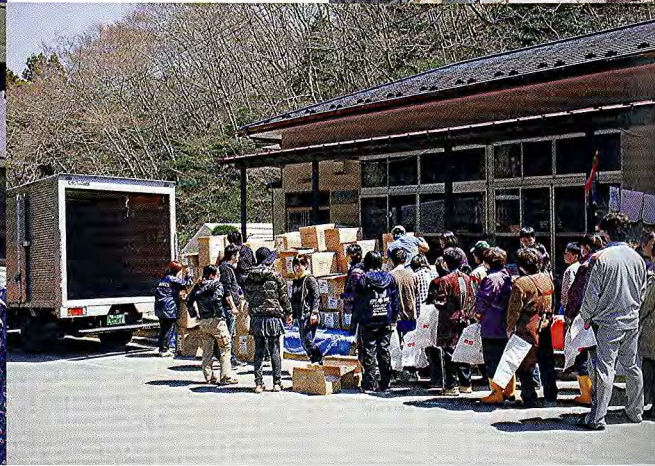
震災支援のあり方としては、緊急対応の時期から、いまや「避難」のフェーズに移行し、それと並行しながら中長期的な「復興支援」も求められ始めている。

五月十八日には、建築家の安藤忠雄氏を実行委員長とした「桃・柿育英会東日本大震災遺児育英資金」の設立が発表され、FRグループはその趣旨に賛同し、柳井代表取締役会長兼社長が発起人として参加するとともに、運営資金として約二億二千万円を寄付することを決定した。今後の計画についてシエルバさんに伺うと、当面の目標をこう語った。

「衣料支援の一方で、これからは被災地でいろいろな活動をしている各種NPO団体と連携して、被災者の自立につながるような支援にも取り組むたい。緊急対応から復興に向かう、その過渡期のフェーズこそが実は非常に重要だと考えています」

BACKSTAGE REPORT ユニクロ

倉庫から支援物資を運び出し、社員ボランティアたちが各被災地へ直接届ける。事前告知があったので、どこでも人々が待ちかねていた。段ボールから衣類を取り出し、手渡す。青空市場のような雰囲気となった。岩手県大槌町(左)と宮城県石巻市雄勝町(下2点)で。





JENによる被災地への支援活動。写真上は避難所での炊き出し、写真下は仮設住宅に支援物資を配布の様子。



支援活動の第一歩とユニクロとの出会い

地震の起きたその日、私はJENのスタッフ六人と赤坂でミーティングをしていました。ビルが大きく船のように揺れましたが、十六年前、たまたま遊びに行った神戸で阪神・淡路大震災を経験していたこともあり、震源が東京ではないことは肌感覚ですぐにわかりました。どこが震源地なのか、東京でこれだけの揺れならば、現地はすでにかなりの被害が生じているはず、早く支援に行かなくちゃ……揺れを感じながらも頭の中はそのこととていっばいでした。何よりもまずは情報収集と、テレビのある部屋に移動させてもらい、震源地が東北の太平洋沖であること、津波が沿岸地域を襲っていることをそこで知りました。十九時には赤坂を出て、飯田橋にあるJENの事務所歩いて向かい、そこで関係各所と連絡を取りながら、初動をどのようなものにするか、スタッフと検討しました。

徹夜明けの翌朝、第一陣として現地に向かうスタッフ二名を決め、彼らは出発の準備のために帰宅し、残ったスタッフは車や必要な物資の手配や更なる情報収集をしました。まさに出発という午後三時半過ぎ、福島第一原子力発電所で最初の水素爆発が起き、予測のつかない放射能のリスクのため、その日の派遣は保留にしました。

支援活動に際して、私たちJENの最優先事項はスタッフの心身の健康。これ

が第一です。二番目が被災者や難民の利益を優先すること、三番目以降はありません。そう言うところには聞こえるかもしれないませんが、スタッフが健康でなければ支援活動はできません。かえって被災地に迷惑をかけることになりかねない。

結局、十二日の夜は出発保留のまま解散。そう決断したものの内心は複雑でした。すでに東北の甚大な被害は伝わっていて、それを知らながらこのまま東京で待機していいのだろうか。いや、これまで世界の被災者や難民を支援してきたJENとして、それはあり得ない。放射能のリスクは未知数だけど、とにかく私だけでも現地に行こう——そう決意して、翌三日の朝に事務所に来ると、前日派遣する予定だった二人が「行かせてくれ」と言ってきた。その顔を見て、「お願いします、頼んだよ」と送り出しました。その二人に加えて、ボランティア一人の計三人が、その日のうちに仙台目指して出発しました。なぜ仙台かというところ、まずはとにかく被災地付近の都市に向かい、そこで支援をしながら情報収集するのが通常のことからです。

私は、震災から十日後の三月二十一日に現地入りしました。それまでは東京で、先発隊の後方支援や被災地の情報収集や支援の調整などをしていました。その間いろいろな企業や団体から、ご寄付やボランティアの派遣や物資提供のお申し出がありました。ユニクロさんにも三月十二日早朝にはご連絡しました。三月の東

BACKSTAGE REPORT

東日本大震災支援の舞台裏 [後編]

世界中の人が 幸せになるための「自立支援」

特定非営利活動法人 ジェン(JEN) 理事・事務局長

木山啓子

Kiyama Keiko

文、取材・編集部
撮影・上岡伸輔、
青木登 (ポートレート) 写真提供 = JEN
photographs by Kamioka Shinsuke, Aoki Noboru



photograph by Aoki Noboru

きやまけいこ 企業勤務を経て、1992年、ニューヨーク州立大バッファロー校社会学大学院修士課程修了。1994年よりJEN (当時の団体名は「日本緊急救援NGOグループ」) の旧ユーゴスラビア地域代表として難民・避難民支援活動に従事。以来、アフガニスタン、インド、モンゴル、チェチェンなど数々の支援活動に携わる。2000年より現職。「エイボンアワーズ・トゥ・ウィメン2005」功績賞、「日経ウーマン」誌2006年「ウーマン・オブ・ザ・イヤー」大賞を受賞。

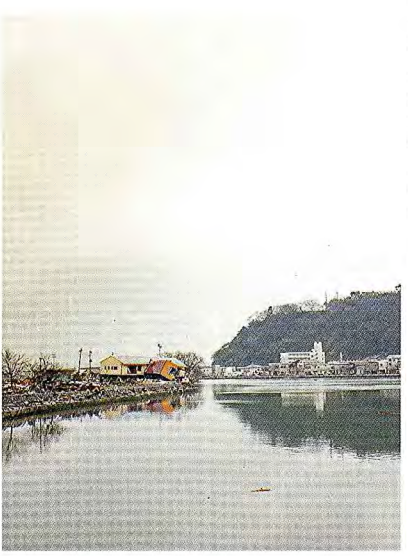
北、寒さが厳しいことが容易に推測できたので、防寒着の提供を要請すると、その場で快諾していただきました。

ユニクロさんとのご縁は十年前前に遡ります。二〇〇一年の九・一一テロ事件の後、アメリカがアフガニスタンに十月八日に空爆、それによって多数の難民が隣国のパキスタンに流入することが予想され、各国の人道支援団体が現地準備していましたが、「プルファクター」といって、難民の発生を必要以上に誘発してしまうことから、本当は、支援を事前に準備することを避けなければいけない。しかしこの場合、空爆が起きてから準備したのでは手遅れになると、準備をしていたのです。結果、恐れていたよりは少なかったものの、かなりの数の方がパキスタンに避難してきました。現地は標高が五千メートルを越えるところもある、寒さの厳しい地域。そこへユニクロさんが、「エアテックジャケットを提供したいので、現地で配っていただけますか」と申し出てくれた。そのときからの付き合い合いなんです。

私たちJENは、闇雲に物資を送りつけないように気をつけていて、支援の方法にこだわりを持っています。その方法とは、支援を急ぎ、効率を大切にしながらこそ被災者や難民のニーズを調査し、把握したニーズに沿った形の支援をする、ということです。これは今回の東日本大震災でも同様です。

ご理解をいただき、すぐにサンプルを送っていただきました。サンプルは、パキスタンでの評判も大変良かったので、その結果をフィードバックすると、すぐに送料負担の上、物資を送って下さいました。そうしたアクションの速さもあることながら、「まずはサンプルを」という我々の要望にも嫌な顔ひとつせずこたえていただいたことが強く印象に残りました。

photograph by kamikata shunsuke



ユニクロさんに、衣類の提供をお願いしたので。

被災者のニーズにこたえるために

現地に入ってからではなく、活動する地域をどこにするか考えました。各避難所の滞留率、つまり自宅に戻れないままにいる人の割合が三月二十二日時点で高い

早く何とかしなきゃいけない。
被災者のニーズを調査して
そのニーズに応えること——
そのことばかりを
考える日々でした。

果がわからないくらい寒いのですから、ストロブのない避難所はどうなのだろう、早く何とかしなきゃいけない。それは被災者のニーズを調査してそのニーズに応えること——。私たちが効果的に動くには、どうすればよいか、そのことばかりを考える日々でした。

まずは孤立している地域がないか、把握することに努めました。重機を駆使して、泥や瓦礫の除去作業を急ピッチで進めていきましたが、とにかく道という道がその態を成していない状況でしたから、救援物資が全く届かない場所もありました。それを聞きつけ調べるのが本当に大変で、車で町中を走り回りました。

避難所や人の集まるところに足を運び、とにかく何がなか、徹底的に聞き込み調査を行い、どこに何がどれだけ足りなのか、それを把握することに全力を注ぎました。そうして得た情報を一週替わりアイテム」としてホームページやツイッターで告知し、支援を呼びかけました。集まった物資は足立区の倉庫に一度集めて、仙台や石巻に借りた倉庫に届くよう手配しました。その手配の最中に、ユニクロさんの物資をどのようにして被災地に配るか相談して、結果的に、ユニクロさんが自分たちで配ることになりました。私たちもそのお手伝いをしました。

この時点で三月下旬。震災からひと月足らず、まだ最初のショック状態が抜けきれないときに、ユニクロさんが被災地まで直接服を配りに来てくれたこと



二〇〇五年、パキスタンのカシミール大地震でも、フリース素材のジャケットやTシャツ、スカーフを計二万三千点ご提供いただきました。そのときはこちらが言う前から、「JENさんはニーズを確認するんですよね」と。このような支援を押し付けられない姿勢は、被災者や難民の立場になって考えていただいている証であり、そのことにとても感謝しました。そのような経緯があったので、今回も



地域が六か所あり、それは気仙沼、南三陸町、女川町、石巻、東松島、山元町でした。中でも石巻は大きな町で、そこを拠点にすれば、気仙沼や南三陸町など山元町以外の全ての市町に足を伸ばせると判断しました。私たちスタッフは、たまたま見つかったプレハブで寝泊りしていたのですが、三月の東北は、こんなに寒くていいのかしらと思うぐらい寒い。大家さんが貸してくれた灯油ストーブの効



BACKSTAGE REPORT

JEN
認定NPO法人 特定非営利活動法人 ジェン

1994年、旧ユーゴスラビア地域の難民支援を機に設立。「生きる力を支えていく。」をモットーに、紛争・災害地で「心のケアと自立」を支援すべく、緊急時から復興までの独自の支援プロジェクトを展開。現在までに旧ユーゴスラビア、チェチェン、モンゴル、インド、イランなどで人道支援、災害復興支援を実施。現在は東北地方の支援の他に、地域のリーダーを育てる人材育成プロジェクト「CHANGE (クリエイティブ・ヒューマニタリアン・アプローチ・フォー・ニュー・グローバル・エフォート)」を、アフガニスタン、パキスタン、スーダン、スリランカ、イラク、ハイチの六カ国で企画している。URL:<http://www.jen-npo.org/>





No. 29 2009年夏号
日本の科学者
100人100冊



No. 30 2009年秋号
活字から、
ウェブへの……



No. 31 2010年冬号
あこがれの
老年時代



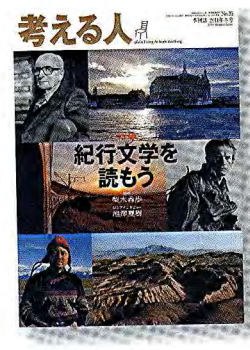
No. 32 2010年春号
はじめて読む
聖書



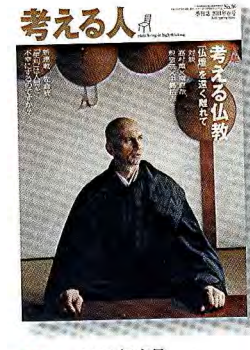
No. 33 2010年夏号
村上春樹
ロングインタビュー



No. 34 2010年秋号
福岡伸一と歩く
ドリトル先生のイギリス



No. 35 2011年冬号
紀行文学を
読もう



No. 36 2011年春号
考える仏教
「仏壇」を遠く離れて

「考える人」定期購読のお申込み方法

- ① 郵送の場合 巻末の専用ハガキに必要事項をご記入の上ご投函ください。
- ② FAXの場合 巻末の専用ハガキに必要事項をご記入の上ご送信ください。
0120-988-959 (フリーコール・年中無休)
- ③ お電話の場合 0120-323-900
(フリーコール・平日のみ 9:00~18:00)
- ④ インターネットの場合
<http://www.shinchosha.co.jp/kangaeruhito/>

- 1年間購読 (4冊) 5600円 (税込・送料小社負担)
- 3年間購読 (12冊) 15000円 (税込・送料小社負担)
- ⑤ 中途解約はご容赦願います。やむを得ない事情で
ご購入の手続きを終えられた後に中途解約される場合は、
送本済み冊数に定価を掛けた金額に、
返金手数料を加えた金額を差し引いて精算させていただきます。
予めご了承ください。

「考える人」バックナンバー常備店

- | | | | | |
|------------------|---------------------|----------------------|-----------------------|---------------------|
| 北大生協 クラーク店 (札幌市) | 八重洲ブックセンター 本店 (中央区) | あおい書店 中野本店 (中野区) | 自由書房 EX高島屋店 (岐阜市) | 宮脇書店 本店 (高松市) |
| 福村書店 北の書籍館 (北見市) | ブックファースト 銀座店 (中央区) | 増田書店 (国立市) | 大塚書店 本店 (京都市) | 宮脇書店 総本店 (高松市) |
| 成田書店 しんまち店 (青森市) | 教文館 (中央区) | リプロ 吉祥寺店 (武蔵野市) | ふたば書房 御池店 (京都市) | 金修堂書店 福大前支店 (福岡市) |
| ブックス弘前 (弘前市) | 南天堂書店 (文京区) | ブックスルーエ (武蔵野市) | アンティックセンター 京都店 (京都市) | ジュンク堂書店 大分店 (大分市) |
| 東山堂 (盛岡市) | リプロ 池袋本店 (豊島区) | オリオン書房 ノルテ店 (立川市) | ジュンク堂書店 京都店 (京都市) | ジュンク堂書店 鹿児島店 (鹿児島市) |
| 八文字屋書店 (仙台市) | ジュンク堂書店 池袋本店 (豊島区) | 長谷川書店 ネスバネヶ崎店 (茅ヶ崎市) | ジュンク堂書店 京都BAL店 (京都市) | |
| 丸善 仙台アール店 (仙台市) | 紀伊國屋書店 新宿本店 (新宿区) | ジュンク堂書店 新潟店 (新潟市) | 旭屋書店 本店 (大阪市) | |
| 金港堂 (仙台市) | あゆみBOOKS 早稲田店 (新宿区) | 萬松堂 (新潟市) | ジュンク堂書店 大阪本店 (大阪市) | |
| 八文字屋 本店 (山形市) | ジュンク堂書店 新宿店 (新宿区) | 本の店 英進堂 (新潟市) | 文教堂 新大坂店 (大阪市) | |
| 岩瀬書店 中倉店 (福島市) | 三省堂書店 神保町本店 (千代田区) | 明文堂書店 富山新庄経営店 (富山市) | ジュンク堂書店 三宮店 (神戸市) | |
| 岩瀬書店 富久山店 (郡山市) | 丸善 丸の内本店 (千代田区) | うつのみや 本店 (金沢市) | ジュンク堂書店 三宮駅前店 (神戸市) | |
| 八重洲ブックセンター | いずみ書店 南口店 (千代田区) | 朗月堂 本店 (甲府市) | 今井書店 吉成店 (鳥取市) | |
| 宇都宮バセオ店 (宇都宮市) | 東京堂書店 神田本店 (千代田区) | 平安堂 長野店 (長野市) | 松江今井書店グループセンター店 (松江市) | |
| 煥乎堂 (前橋市) | 青山ブックセンター 六本木店 (港区) | ブックセンター名豊 緑店 (名古屋市) | 喜久屋書店 倉敷店 (倉敷市) | |
| 須原屋 本店 (さいたま市) | あおい書店 五反田店 (品川区) | 星野書店 近鉄バッセ店 (名古屋市) | 文楽堂 (山口市) | |
| ブックデポ音楽 (さいたま市) | あゆみBOOKS 五反田店 (品川区) | ちくさ正文館 (名古屋市) | ブックシティ平穂 徳島店 (徳島市) | |
| ときわ書房 本店 (船橋市) | くまざわ書店 田園調布店 (大田区) | | | |

味は本当に大きかった。被災者の人たちからすれば、着の身着のまま家を飛び出して着替えがない、それに加えてこの寒さ。そこにユニクロがやって来た。そこには下着や防寒着など、のどから手が出るほど欲しかったいろいろなアイテムが並んでいる。しかも新品。ユニクロのロゴの入ったレジ袋を手にとって、「自分の好きな服を、あたかもお店で「お買い物」するように選ぶことができる。被災者にとって、こんなに嬉しいことはなかったと思います。服を手に入れた以上の心理的な効果があったのではないのでしょうか。それは、ユニクロの社員の方々が現地まで来てくれたなければ決してできなかったことです。商品知識のない我々には真似できません。被災者の方々が本当に喜んでお世辞ではなく、私たちのこだわった「ニーズ」に、ユニクロさんが最高の形でこたえてくれたと思っています。



石巻市中屋敷に立ち上げた「コミュニティ・カフェ」。

少しでも早い自立支援を

これまでもこれからも課題は山積みです。これを挙げるとキリがないのですが、まず、国や県、地方自治体といった公的機関と、企業、NGO、ボランティアといった民間との連携が不十分です。そのため人的にも物的にも資源を有効に活かして切れないという状況が続いています。公的機関は絶対に人手が足りません。

このことを痛感しました。「自立支援」のために重要なことのひとつは、仕事を見つけることです。そのための公の動きがどのように進んでいるかを確認するためには訪れたのですが、すでに職員のみならずはオーバー・ワーク状態。そこで、「東京から極めて事務処理能力の高い人がボランティアに来てくれます。何

人が派遣してもらえばいいのでは」と聞いたところ、「いや、私たちは厚生労働省の管轄下にある。上の方に確認しないと……」と尻込みするばかりでした。緊急事態なので、超法規的に動かなければいけないのに、これにはさすがにがっかりしましたし、気の毒に思いました。完全な復興までは、まだまだ長い時間がかかると思います。これから私たちJENが取り組むべきことは、やはり「自立支援」です。そのための第一歩として、悲しみにくれる被災者の方々の心のケアを目的とした「コミュニティ・カフェ」を石巻に開設いたしました。これは喫茶スペースのみならず、マッサージのサービスを提供するなど、少しでも現地の方に笑顔と元気が戻るように機能すればよいと考えています。

さらに津波で壊滅状態となった地域に少しでも活気が戻るように、何らかの形で商店を再開される被災者の方々の支援を計画しています。現状では、人が戻らないのでお店も戻らない、お店が戻らないから人も戻らないという悪循環に陥っています。それを解消するために、例えば移動式の八百屋さんやレストランを設置、私たちがシェフを雇ってそこで料理を提供してもらおう、といった試みです。

震災から三ヶ月が経過しようとしています(編集部註 六月六日取材)。「何が必要ですか」と聞かれても、「いや、生きていくだけで十分です」と答える被災者の方がたくさんいます。だからこそ、

もつともつと彼らのニーズを掘り起こしていかなければいけないと考えています。それに「心のブロック」というか、心に蓋をしなければ毎日暮せないような人がたくさんいます。「あのときこうしていれば、あの子は助かった」などと自分を責め、楽しむことを自分に許さない。他人とコミュニケーションが取りづらくなって周りから孤立してしまふ。ソーシャルワーカーや心療内科のお医者さんたちと連携しながら、その人たちの「心のケア」を進めていきたいと思っています。

JENの究極の目的は、世界中の一人ひとりが幸せになることです。そのためには、辛いかもしれないけど、もう一度人と人との触れ合いを取り戻さなければいけない。ときにはそれで傷つくこともあるかもしれないけど、徐々に心を開いていって、温かい絆を結び直してもらいたい。そのためには、我々も最大限の努力はしますが、一人ひとりの協力もとても重要だと思っています。

「ユニクロ、来てくれたんですね。嬉しい！」——各訪問先では1時間も前からたくさんの人が列をなして待っていてくださいました。その様子をのあたりにして、ボランティアとして参加した社員は、ユニクロに対する期待や信頼の高さに身の引き締まるような思いを味わいました。ユニクロ社員は今後とも被災地に赴き、衣料の直接配付を行ってまいります。また被災地でさまざまな活動を行っている各種NPO団体とも連携しながら、被災者の自立支援となるような中長期的な「復興支援」活動も応援してまいります。